釣れ釣れなるままに

１９８３年思い出の釣行記

幼少の頃より

鹿島釣狂

昭和２５年、北海道新十津川町大和の水飲み百姓の次男坊として産湯を使った。農業用水路やため池、そして福井谷川、尾白利加川、石狩川に囲まれて、釣りをして遊ぶ環境は整っていた。

【五十嵐の水路】
近所の五十嵐さんの用水路で水浴びをした。水田に水を引くためのコンクリート製の水路で底が泥でないのがいい具合なのだ。沢山の先輩達との水浴びで楽しかった。腕を水路の底に着けて水の流れに任せて下るだけなのだが楽しかった。おそらく下着は着けていなかったものと推定される。初めて１０㎝程のウグイを釣ったのもこの用水路だ。

【藤崎池】
隣の農家の池でドジョウを釣った。釘を叩いて曲げたハリにミミズを刺し、木綿糸と柳の木で釣ったのだ。金気混じりの赤茶けた池だった。

【浦上池】
元地主の農家の池には金魚が放されていた。それに続く大きな池には鯉が放されていた。ここで釣り糸を垂れることはなかった。

【自宅池】
この当時はどこの家にも用水路から水を引いた小さな池が作られていた。野菜を洗ったり、

風呂の水をくんだり、泥靴を洗ったりの生活用水だ。中央に板の橋が架けられていたが落ち着きのない私はよくここに落ちてはずぶ濡れになっていた。小学生高学年になると、尾白利加川で釣った頭に白い突起の付いたアカハラを放した。ナマズも放してみたがいつの間にかいなくなっていた。池に泥が溜まるので、晩秋になると父が泥を掻き出した。その泥の中で沢山のドジョウが蠢いていた。

【ヤマメ】
野曽さんの用水路では２０㎝ほどのヤマメがよく釣れた。この情景はよく夢に出てくる。岡さんの用水路でもヤマメを追いかけて手掴みでとった。

【小学４年】
石狩川の支流である尾白利加川へ叔父に初めて釣りに連れて行ってもらった。ミミズを探したがこの日に限って見つからなかった。悲しかった。自転車で叔父の後を追った。小ウグイが沢山釣れた。背後のヤナギに仕掛を何度も引っかけては叔父に怒られた。

【小学６年】
尾白利加川で初めてアカハラの３０㎝上を何匹も釣った。白腹も３０㎝はあった。竹の延べ竿だった。兄と二人で意気揚々と凱旋したものだ。

【父の釣り】
私達が大きなアカハラを釣ってくるようになると、父が釣りに付いてきた。全くの素人で竿を操ることが出来ない。竿の弾力を利用して仕掛を投げ入れることが出来ないので垂らし釣りのような格好になる。なんとか釣り上げて欲しいと思って見守っていたが釣ることは出来なかった。子どもたちと一緒に遊ぶことのなかった父だが、この時は一緒に釣りに行ってくれたことが嬉しかった。

【分けてくれ】
私が、アカハラの大物を次から次へと釣り上げているのを見て、滝川から来たという釣り人が「アカハラを分けてくれ」と言った。「分けてくれ」という意味がよく分からずに差し出すと、その方が私に５００円をくれたのだ。中学１年生の私にしてみれば物凄い大金だったように思う。親には内緒にして、学校からの帰り道にチビチビと買い食いをした。内緒にしたことや買い食いしたことが心苦しかったが、お菓子の魅力の方が勝っていた。

【福井谷川】
尾白利加川の支流になる。春の農作業の合間にヤマメを釣った。釣りをしたことが家族に分からないようにとヤマメは放してしまった。

【福井谷川水門】
５月の頃になると水門にヤマメが集まった。１５㎝～２２㎝程のもので今から思えば銀毛ヤマメだと思う。いわゆる密漁になる。中学生の頃にはそのことを知っていたが、釣りはしていた。あのプルプル感がたまらない。生かして持ち帰ろうとしたが、すぐに死んでしまった。高校の時、友だちを誘ってここでヤマメ釣りをした

【平沢沼】
鮒がよく釣れた。「入れました。引きました。釣れました。」とリズムよくかけ声をかけながら連続して釣ったのが印象深い。膝小僧付近まで池に浸かって釣りをしていて、池から上がるとふくらはぎのところに大きな円形のヒルが何匹も喰い付いていた。私の血を沢山吸い込んで膨れあがったものらしい。谷地ウグイというのもよく釣れた。ウグイに緑色の斑点を付けたような魚で、私達はそれを馬鹿にしていた。
　山鳩の「ボーッ、ボーッ、ボッボッー」という鳴き声やオオジシギの「ズビッ、ズビッ、ギュルギュル、ギュルルルー」という翼を切る音やエゾセンニュウの「ジョッピンカッタカカッタカジョッピン」という声を楽しみながら釣りをした。
　釣りをしていると、鉄砲の音が聞こえてきた。鴨撃ちが解禁になると池の周囲に集まる鴨を撃ちに来ていたのだ。散弾銃のバラバラバラッと林に当たる音は気持ち悪かった。釣りをしている私に気付かずに撃っているとしたら、大変なことだ。この頃は銃を水平に向けて撃つのは禁止されているということを知っていたが、万が一ということもある。流れ弾に当たらないように早々に引き上げた。こんな池には誰も来ることはないだろうと、柳の切り株にナイフで相合い傘と名前を彫ったりもした。

【更田君】
中学１年の時、更田君と釣りに行くことになった。更田君が余りにも釣り自慢をするので一緒に行こうと誘ったのだ。約束通りやって来たが、荒瀬で私が３０㎝以上のアカハラを何匹も釣りあげても更田君には釣れなかった。沼では大丈夫だろうと平沢沼で鮒釣りをすることになったが、これもその差は歴然としていた。更田君が１匹釣る間に私は１０匹ほど釣り上げていたのだ。

【ナマズ】
小学校の教頭先生が釣ったナマズをもらった。風呂にあったタライに入れても尾鰭が曲がるような大物だった。次の日になってもその次の日になっても元気に泳いでいた。何日か経って、祖母が刺身にしたのを父が旨そうに食べていた。
兄が石狩川で６０㎝ほどのナマズを釣った。自分が釣ったのは高校生になってからだと思う。秋になってから長雨の後、福井谷水門で群れていたのを沢山釣った。

【ヤツ目】
尾白利加川にヤツメが上った。大人は８番線に錨バリを付けたものでとっていたが、違反だと聞いていたので軍手をはいて手づかみした。またその方がよく捕れた様な気がする。祖母がヤツメをぶつ切りにしてフライパンに油を引いて焼いたのを父が食べた。自分たちは気持ちが悪くて食べられなかった。

【引っかけ釣り】
叔父、兄と一緒に尾白利加川上流にアカハラ釣りに行った。叔父は淵に群れているのをいわゆる引っかけ釣りで次から次へと釣っていた。私達はミミズを付けてのエサ釣りなのだが、それでも大物がよく釣れた。しかし、その錨バリを付けた釣法が羨ましく思っていた。その釣ったウグイをどうしたのかは思い出せない。

【アカハラの刺身】
私達がアカハラを釣ると祖母がよく刺身にしていた。大人は食べていたが、私達は食べなかった。大人になってから何度か挑戦したがアカハラは煮ても焼いても不味くて食べられない。

【ウグイの甘露煮】
ウグイや鮒を釣ると必ず家に持ち帰った。祖母が雑穀と一緒に炊いて、鶏の餌にするのだ。鶏がよく卵を産むようになるので喜ばれた。秋口に持ち帰ったものは石炭ストーブの上に金網を張って乾していた。冬になるとそれを甘露煮にして食べた。これは私達子どもでも食べることが出来た。

【カニ捕り】
中学生になると石狩川でも釣りをした。秋口にはよくカニが掛かるようになったので、私達はカニ網を作って石狩川に向かった。エサはサケの頭やトウキビ、釣ったウグイ、ミミズを針金に通したものだった。朝倉商店から売れ残りの腐敗しそうなイカをもらってきてエサにしたのに一番よくカニが集まった。柳の木を鉈で切り倒し、それにカニ網を吊して川の淵に仕掛けておいた。夜の方が捕れるというので、兄を先頭にした少年たちだけで石狩川にカニ捕りに行った。この時はカマスにいっぱい捕って凱旋し、隣近所に配って歩いた。祖母がカニを入れた鍋を火にかけるとガサゴソと鍋底を引っ掻く音が聞こえてきたが、そのうちに静かになった。真っ赤になったカニをみんな無言で頬張った。

【順ちゃん】
兄が勉強に忙しくなると、隣の２歳下になる順ちゃんとよく釣りに行った。石狩川と尾白

利加川の出合いでウグイを釣ったのが楽しかった。釣れるのは小さなウグイなのだが、竿をなかなか上げないでいる。大物の振りをしているのだ。しかし、竿先を見つめた順ちゃんが見破ってくる。二人して大笑いをしながら釣り続けた。

【浜益川・泥川のヤマメ釣り】
子どもの時に叔父から話を聞いていた浜益川に釣りに行った。大きなヤマメが次々と釣れたという憧れの川だった。釣果はピン子ヤマメ１匹だった。

【渓流会】
学生になって１年目、「渓流会」という釣り会に入った。そして、１年先輩である法学の久保氏と同ゼミの堀田氏と一緒に湧別川にオショロコマ釣りに行くことになった。列車に乗り込み奥白滝で降りて渓流に分け入っていった。私の竿は４本つなぎで４ｍ程の竹竿だ。グラス竿を持った久保氏や堀田氏に先行されて、その釣り残しを拾い釣りしながら遡ることになった。川に中州があり、その一方に入ると面白いように大物が釣れた。それでもって２８㎝以下多数のオショロコマを釣ることが出来た。寮に帰ってから醤油で煮て食べたが、飢えていた寮生にはなかなかの評判だった。
　夏休みに、同ゼミの蔵田氏とキャンプをしながら同じ奥白滝で釣りをした。暗くなってテントを張ったが、熊に襲われないかと肝を冷やした。雨降る夜にテントにまで雨水が入り込み背中が濡れた。湧別川は濁流となりあまり釣ることは出来なかった。
　その後、月１万２千円の生活費の身分でありながら、３，０００円ほどのグラス竿３．６ｍを買った。この竿は芦別常磐時代、空知川で５０㎝強のニジマスをあげた時まで使い続けた。その時はタモを持っていなくて川原にずりあげた時に折ってしまったのだ。
　「渓流会」では大学祭の模擬店で寿司を提供した。ヤマメ寿司と銘打っていたが、実はニジマスで寿司を握っていたのだが、すこぶる評判だった。また、「渓流会」では、名寄市にある智恵文沼で鮒釣り大会を開いた。ミミズで鮒を狙うのだがあまり思うような釣りは出来なかった。この時に緋ブナと鉄魚という魚を初めて見た。２年生の時に朱鞠内湖でキャンプをした。この時も鮒釣り大会が開催されたがやはり思うような釣りは出来なかった。竿が短くて、あの大きな湖では歯が立たなかったのだ。

【栗沢町茂世丑】
　最初の赴任地は栗沢町茂世丑だった。校長、教頭、６０代の女性教員、これも６０代の女性用務員、そして私の５名の職員だった。受け持ちは５年性４名、６年生７名の複式学級だった。いい子たちばかりだった。日曜日には宛がわれた２棟長屋で子どもたちと一緒に遊んだ。隣は空き家だった。朝寝坊で遅刻しそうになると子どもたちが迎えに来た。大雪の時は玄関先の雪かきもしてくれた。この時の子どもたちは今でもよく遊びに来てくれる。

地域の青年団に入った。よそ者を快く受け入れてくれて、キャンプやボーリング、麻雀、ダンス、バレーボール、卓球、合唱などに誘ってくれた。会長が渡辺伸ちゃんで仲良くしてもらった。伸ちゃんの家では養魚場も経営していてタダでコイ釣りを楽しんだ。また、そのため池から逃げ出したコイが用水路にもいたので、それを釣って楽しんだ。

近くの農協支所の支店長が溝口さんという方で釣りに凝っていた。彼はゴルフにシフトしたので釣り道具を分けてあげるというので、１ヶ月分の給料よりは少し多い５万円ですべてを引き取った。ゴムボートだけでも５万円はしたとだろうと思われる。３本の投げ竿やリールは４０代まで使い続けた。また、同じ農協職員に連れられて、美国の防波堤で釣りをした。投げ方も分からない自分が見よう見まねで防波堤の向こう側に向かって竿を振ったが、ホッケや真ガレイが次から次へと掛かった。

栗沢町にある釣り会で釣り大会が開催された。農協職員に誘われて参加したのだが、アカハラだけで入賞してしまった。静内の砂浜だったような気がする。

【深川市一巳】

茂世丑小は２年で閉校になったので深川の一巳小に赴任することになった。青年団に手伝ってもらって引っ越したが、受け入れてくれた一巳小の職員が荷物の中に釣り道具がビッシリなのを見つけてくれて、釣りに誘ってくれた。小平町の富岡というところでカレイ釣りをしたのだが、真ガレイや砂ガレイが沢山釣れた。今でもその頃を思い出して釣りに行ってみるのだがさっぱり釣れない。

この頃は、釣りに誘ってくれた長澤氏や渡辺氏と一緒によく飲んだ。家庭にまでお邪魔して夕食をご馳走になりながら職務についても学んだような気がする。麻雀にもよく誘ってくれた。奥様方には随分とご迷惑をかけた。

正月に初山別村の豊岬に１泊でカンカイ釣りに行った。免許取り立ての私の車（三菱のギャランＧＴＯ）に３人（渡辺、長澤、宮武）を乗せての冬道は緊張した。乗せてもらっていた各氏も私以上に緊張していたことだろう。私の１投目に４０㎝強のカンカイが釣れたが、その後は全く魚が釣れなかった。その時のことは後の「釣れ釣れなるままに」のどこかで書いた。

夏の職員旅行では網走市に立ち寄った。朝方網走港内で長澤、渡辺、高野、宮武氏と一緒に釣りをすることになった。宮武氏は竿３本を揃えていた。私は、竿を１本だけ持って行っていたのでそれを使った。他の者は竿がないので道糸に仕掛を付けて投げ込んで釣ったのだ。それでもカレイは釣れた。私が４０㎝ほどのアカハラを釣ったので、高野氏が旅館に持ち帰り刺身にして出してもらった。美味しかったような気がする。網走港からの帰り道、浜茹での毛ガニをどっさり買った。観光バスの中で酒を飲みながら貪った。酒に浸って、間借りしていたガラス店に帰ってから、裸のまま窓を開けて眠り込んでしまった。朝気が付いてみると全身に蚊の刺された痕が残ってボンボンに腫れていた。

サロマ湖にも職員で釣りに行った。キムアネップの船宿で１泊して、早朝に舟を出して

もらってクロガシラ釣りをした。数は上がったが船宿に貼り付けてあった魚拓にするようなものは、釣れなかった。また、この時は途中から狙いをチカに変更して沢山のゴンボチカを釣った。留萌沖でも船釣りをした。アブラコやソイの大物が沢山釣れた。私が釣り上げた大アブラコに他の仕掛が絡まっていた。背中合わせにして釣りをしていた先輩が「それは自分の仕掛だ」と言って大アブラコも持っていった。アブラコの口に掛かったハリは自分のモノだった。自分では料理ができないので他校の先輩の家に持っていって、たいそう喜ばれた。

女房とも付き合い始めた頃で釣りに誘って出掛けた。こちらは夢中になって釣っているのだが、彼女は関心が無いようで砂浜で寝転んでいた。富岡の砂浜だったが彼女のトイレなどは気にしていなかった。釣った真ガレイを干して食べようと思った。家の中で干したのだがそれに銀蠅が卵を産み付けていたらしい。それを押し入れの中に仕舞い込んで忘れてしまい、居間にウジ虫が這っていた。

日曜日、受け持ちの４年生の子どもたちを連れて石狩川の堰堤へ釣りに行った。同学年を組んだ先輩（長澤、植村）が心配して立ち寄ってくれた。無謀なことをしたものだ。夏休みに４年生の子どもたち全員を秩父別町にある雨竜川の堰堤へとサイクリングに誘った。５年生の時も同じようにしたら、今度は保護者が心配して軽トラを出してくれたり、一緒にサイクリングに付き合ってくれたりした。自信過剰の慢心家だった。

芦別の新城との境にある内大部川の支流オロチョン川に釣りに行った。堰堤の下で大きなニジマスが泳いでいた。３．６ｍの竿での１発目はハリスが簡単に切られてしまった。次に５．４ｍの竿に取り替えて釣り上げてしまった。ニジマスの口には先ほど切られたハリが突き刺さっていた。４０㎝強のニジマスだったが私には初めてのニジマスでとても大きく思えた。

【砂川市江陽】

この頃も釣りに行くのは決まって小平町富岡周辺だった。浜益港にも近くなったので行くようになった。浜益港ではホッケがよく釣れた。同じ長屋の及川氏、その息子さんと釣りに行った。波が高くてやむなく留萌港に入ったのだが、サビキで３０㎝上のニシンがよく釣れた。及川氏の奥さんが料理して出してくれたニシンのフライは大変美味しかった。

その及川氏の実家がある静内町に遊びに行った。及川氏の息子さんに案内されて用水路でヤマメ釣りをした。よく釣れた。小さなルアーにもよく反応して喰い付いてきた。静内川から上ってきたと思われるサケが泳いでいたのでその鼻先にルアーを持っていって思いっ切り杓った。サケが掛かったが一気に竿を伸されて道糸が切られてしまった。

雄冬のソイ釣りにもよく行くようになった。二つ岩トンネルの脇に付いた狭い通路を１００ｍ程進んでいくと大きな岩場が広がっていた。その岩場を上がったり下がったりしながら釣り場を捜して歩いたのだ。釣果はさほど変わることはなくガヤやソイ、そしてアブラコがよく釣れたものだ。現在は床丹覆道の陰になって行く事は出来なくなっている。

次によく向かったのが湯泊岬である。これは、次の項に譲るとしよう。